

特集に当って

倉谷 好郎

オフィス・オートメーション(OA)が、今日的課題として社会の大きな関心と注目を浴びている現在、ORワーカーとして、またOR Professionとして、OAの展開をどのように捉え、その発展にどのように対応してゆくかということを真剣に考えるべき時期にきている。

OAについては、そのカバーする領域や、その性格、本質について、必ずしも完全な合意が関係者の間に存在するわけではなく、OA先進国のアメリカでも、汎用計算機をOA統合化の中心に構想を進めている集団(たとえばIBM社)、広域にわたる電気通信を中心に諸機器の統合化を考えている集団(たとえばA.T. and TによるIntelligent Public Network)、計算機制御によるメッセージ交換システム-PABXを中核にOA機器の統合化を指向している集団(たとえばRolm, Intecom, Mitel社)および広帯域同軸ケーブルによるローカルネットを中心にOAの展開を進めている集団(たとえばXEROX社)等のようにOAの全体像についても構成機器の統合化の中核をどう考えるかによってそのphilosophyはまちまちである。

またOAの機器メーカーの他に多数のコンサルタント会社、OAユーザグループ、行政官庁(商務省標準局が中核)、大学教授(MIT, Stanford, UCLA等)等がOAにとりこんでおり、百家争鳴、戦国時代の感すらある。(筆者は昨夏渡米し数名の専門家学者等と面接討議しその印象を深くした。)

OAは、その発展段階から考えて、分散処理とインテリジェント化を指向するOA機器単体の開発、利用の段階(第1段階)、単体機器の複合化の段階(第2段階)ワークステーションを中心とする単体機器の総合的システム化、ネットワーク化の段階(第3段階)と3段階に分けられ、現在は第1段階にあるが、一方若干の機器機能の複合化もすでに試みられているようである。ORはこれらのOAの発展段階のすべての段階を通じて大きな貢献が

可能でありまた期待されていると考えてよいであろう。

すなわち第1段階および第2段階では、単体および複合機器開発のためのオフィス機能の解析と構造化、および構造化に成功した領域において、オフィス機能をオフィス機器の仕様に効率的に連結させる作業があり、この面においてもORの思考と手法が大いに役立つであろう。第3段階では、企業活動の最適化のための経営意思決定システムへ連動したOAの構築においてOR手法と方法が大きな寄与をすることも疑いない。本特集においては、OAとORとの予期される深いかかわりに焦点を当てて編集することを、当初念願していたが、これは、OAとORとのインターフェースが現実にはあまり進行していない現状から無理があるので、できるだけ論文中にOR的視点をとりこんでいただくことにして、下記の諸氏に執筆を依頼した次第である。

「OAの全体像」山本直三氏。OAの専門家によるOA発展の背景と全体像に関する論説である。「OAシステムの構築」池田毅彦氏。岡村製作所における多年にわたる経営情報システムの開発が、現在の同社におけるOAシステムにどのようにつながっていったかを中心に論じられたものである。「OAにおけるエンドユーザ用ソフトウェア」中村昂氏。OAが、そのユーザである事業体のオフィスに効率よく、とり入れられてゆくためには、ユーザ側で、使用の簡単容易なソフト、言語のOA機器メーカーによる開発が鍵になることは容易に想像できる。このニーズに応じて開発された1つの言語が、エンドユーザ言語POLで、その内容がこの論文で詳細に述べられている。「電気通信革命とOA」小松崎清介氏。近年における電気通信技術の驚異的な発展は瞠目に値するが、単体技術の開発から、複合システム技術へと開発が進む過程で、対象市場の複合化を生み出し、広汎にそのプロセスが拡大してゆく状況を広い視点から展望されたもので、電気通信技術を基底にした新システムが、OAのインフラストラクチャとしても重要な役割を果たすことを論じられた論文である。

くらたに よしろう 筑波大学